

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山田 敏幸

本研究は、日本語において、関係節が複数の被修飾名詞句候補に先行する構文の実時間的処理について、複数の心理言語学実験手法を用いて検討したものである。

関係節構文の構造的多義性の解釈のあり方については、様々な言語・様々な角度からの多くの先行研究があるものの、日本語の実時間処理において、各要素の入力時点ではどのような処理がなされ、最終的にどのような解釈に到達するのかという点については、一貫性を持った説明が得られていなかった。処理の効率性を考えると、先に入力された関係節は、その後もっとも早く入力される要素を修飾するものとして解釈し、その後の入力より矛盾がもたらされない限りその解釈を固定させるというのが最も妥当および認知的な負荷の低い処理であることは自明であるのに関わらず、最終的な解釈に至るまでの間に解釈の変更が行われていることを示唆するデータが多く報告されており、しかしながら処理中のどの時点で、どのようなプロセスを経てそのような解釈に至るのかという疑問が長く解消されてこなかった。

山田氏の研究は、それぞれの情報入力時の解釈のあり方、またそうした最初の段階の解釈のコミットメントの強さがどのような情報により左右されうるか、さらにその後どのような情報により解釈が改めて変更されることがあり得るか、という一連の問いに包括的に答えようとしたものである。文全体が含意する因果関係や、一方局所的な構成素同士のつながりの典型度合い、意味的整合性など、先行研究で検討されてこなかった要因を含めた様々な観点から、読み時間計測実験、眼球運動測定実験、語探索課題、またそれぞれの実験刺激を統制するための予備調査やコーパス分析などの手法を駆使して検討を重ねた。

この結果、日本語の関係節処理においては、関係節そのものの入力に続いて最初に入力される要素との構造関係がいったん成立することを、従来の研究で指摘されたようなアーチファクトを排除した手法で改めて示した。さらに後続する要素との間にも構造関係が成立しうる場合には、文末までの間に得られる情報に応じて一定の時間幅の中で再分析がなされることを示し、文処理における即時的解釈のあり方はその構造的位相や当該入力もたらす情報によって異なることを指摘した。さらに、こうした実時間実験から得られる知見と、コーパスなどの言語資料にみられる当該構造の分布が必ずしも一致していないことを示し、人間の文処理におけるバイアスが構造頻度により直接的に説明できるとするモデルに批判的なデータを提供した。これらの点は、日本語の文処理研究に複数の角度から貢献するものとして評価された。

ただし一連の実験において、仮説構築の前提としていたいくつかの点と異なる結果が得られたこと、またそうした点と、先行研究で得られた知見との整合性について、理論的な検討が不十分に終わっている点も残り、こうした弱点は論文審査の場においても複数の審査員から指摘された。

しかしながら、日本語関係節解釈の処理に関して知見や検討が不足している点を包括的に、様々な幅広いアプローチから検討を加え、今後の幅広い理論的検討の進展につながる成果を貢献したという点については審査員全員評価に値するという見解で一致した。従って、本審査委員会は、山田敏幸氏に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。